

事例 1

みどころ



全職員によるチーム支援(小学校)

～「教師全員で子どものよい点を褒めよう!」を合い言葉に～

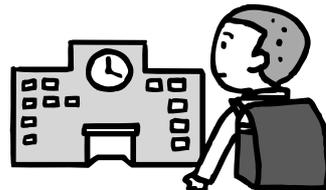
ユウキさんは、前籍校では授業中教室に入らず、一人校舎の陰でトカゲや虫を捕まえて過ごしていました。心配した保護者は落ち着いた小規模校で学ばせたいと願い、1年生の時に本校に転校してきました。本校は小規模校の利点を生かし、「教師全員で子どものよい点を褒めよう!」を合い言葉に子どもへの支援を行っています。そうした学校生活を通して、ユウキさんの行動は次第に落ち着き、現在は最上級生として全校の先頭に立って活躍しています。

●転校時の家庭の不安

- ・授業に参加できるかな?
- ・友だちと仲良くできるかな?
- ・学校のルールを守ることができるかな?



両親・祖母



- ・全校児童 60名
- ・全校職員 15名
- ※自律学級未設置

●本校の特色<学校運営の基本方針>

- ① 一人一人の児童を大勢の目で見え広い視野に立ってとらえましょう。あらゆる場面を生かし、先生方の持ち味を生かして支援に当たりましょう。
- ② 会議以外でも日常的に児童についての情報交換を行い、情報を豊富にすることで児童の内面に迫り、お互いに生かせそうな支援の仕方を取り入れましょう。
- ③ 児童のよい言動に目を向け、たくさん褒めましょう。

●担任ホシノ先生の取り組み



担任 ホシノ先生

<ユウキさんへの願い>

- ・授業中は教室にいてほしい。
- ・徐々に授業に集中できるようになってほしい。
- ・思い通りにならない時でも興奮せずに生活できるようになってほしい。

<先生方へのお願い>

- ・支援についてのアドバイスをお願いします。
- ・学級以外での様子を是非担任に知らせてください。
- ・よいことは褒め、不適切な行動が見られたら注意してください。

ホシノ先生は、ユウキさんについて職員会で相談しました。ユウキさんへの願いを他の先生方が理解ししてくれたこと、また協力をお願いできたこと、そして校長先生から「支援について不安がありそうですが、いつでも相談してください」と声をかけていただいたことで、不安が少し和らぎました。

「教師全員でユウキさんのよい点を褒める」ことを共通理解し、ユウキさんにかかわりました。

◆ホシノ先生が作成した「個別の指導計画」のポイント◆

- 1 意欲がもてるよう、授業の導入を工夫する。
- 2 ロールプレイ学習などを通して、友だちとのかかわり方を学習していく。
- 3 課題は短時間で終わるようにし、できた喜びを感じることができるようにする。
- 4 児童会活動、連学年での活動、縦割り班などでの活動を通して、他の学年の児童とかかわり、別の大きい集団でも活動できるようにしていく。
- 5 全校職員でユウキさんを見ていき、様々な場面で必要な支援をしていく。



●支援の実際

ユウキさんの様子

授業研究会

- ・問題を図や絵で示そう。
- ・スモールステップを大切に。
- ・問題等必要最少限の文字や数字、記号で表そう。

理科の先生

得意なところを生かして授業に取り組めるように工夫しました。

他学年の先生

同じ動作ができるまで模倣を促し、ゲームの中で失敗しても、一連の動きのよかったところを褒めました。
(ソフトバレーボール)

主治医

話の聞き落としがあり、次の行動がとれなかったり忘れ物があったりするようです。聞くことより見ることが得意なので、大切な指示はメモしたり、掲示物は目の高さに張ったりするなど、視覚に訴えるようにしましょう。

・自分から学習に取りかかるようになりました。発言もし、部分的に自力で問題を解けるようになりました。

・「昆虫の体の裏側はどうなっているか」の質問に、詳しい絵を描いて「ミヤマクワガタは、下のはらに4本線があって、2本あしがある。・・・」と添え書きをしました。女子の友だちが、その図の詳しさ、観察の細かさに感嘆の声を上げました。

・給食の配膳に自分で身支度も調えるようになりました。

・積極的にゲームに加わり、難しい動きにも挑戦する姿が見られるようになりました。

・だんだんに早くなってきたので、食べる量も増えました。今では時間内に食べ終わり昼休みに遊ぶ時間がとれるようになりました。

・少ない指示で、話の内容を受け止めることができるようになりました。

・音楽会は、しっかり演奏しました。家の方、ホシノ先生、音楽専科の先生は、一緒に大喜びしました。

校長先生

興味をもっていることや得意なことが見えてきますね。

保健の先生

給食準備の時には、手洗いと身支度がちゃんとできているか見ました。最初は、一緒にやったり、手伝ったりしました。

給食の先生

全校でランチルームでの昼食時、ユウキさんの隣に座り、声をかけました。食べられそうな量を配膳し、親しみ易い話題や栄養の大切さの話をしながら、時間内に食べるように促しました。

家庭との連携

毎日連絡は連絡帳、急な連絡は電話で連絡を取り合っていました。音楽会の時に本人が希望した木琴は、テンポが大変に速く難しいパートでした。ホシノ先生と音楽専科の先生で相談し、家でも練習を見てもらうようにお願いしました。

ユウキさんの最近の様子

- ・授業中、やるべきことが分かり授業に集中して取り組んでいます。学力もだんだん向上しています。
- ・同級生とトラブルを起こすことや感情を制御できず困ってしまうことも皆無に近い状態になっています。
- ・避難訓練時に不明者となった友だちを真剣に捜し、心配する姿が見られました。児童会やクラブなどの縦割り活動の時に、落ち着いて下級生の面倒を見ています。



皆に助けいただき、ありがたい気持ちで一杯です。

●校内支援体制のポイント

- ・全校職員で学校運営の基本方針を確認し、理解して取り組んでいることです。
- ・学校長が児童理解についてリーダーシップを発揮し、自らも積極的に子どもとかかわりをもっていることです。
- ・教職員が互いに学びあう姿勢を大切にし、情報を共有することを大切にしていることです。
- ・会議だけではなく、休憩時や放課後等、生活が子どもの話題でいっぱいなことです。

事例から学ぶ

すべての教師が、すべての子どもにかかわり、よさを認め褒めるといった支援を行えば、学校は子どもが安心して力を発揮し、子どもの力を育む格好の場となります。これは本事例のような小規模な学校だからできる、ということではありません。どの学校においてもできることです。そして、こうした教師の支援の姿勢は、校長先生のリーダーシップによって育まれていくものなのです。



事例 2 学生スタッフによる個別の支援体制(小学校)

～教員のノウハウと学生のやる気を無理なくつないで～

校内支援体制を推進していく上で、学校職員だけでは十分に対応できない「人不足」の状況を打開するためには、どうしたらいいでしょうか。本事例では、既存の制度を活用して、学生スタッフの導入を進めた事例を紹介します。

その中で、職員と学生スタッフが、短時間の打ち合わせや「記録・連絡簿」のやり取りなど、無理なくできる方法で情報交換しながら、一人一人の子どもの支援に丁寧に当たったところ、学習及び学校生活に対する意欲の向上など、一定の成果が見られました。

●人不足を補うという発想から

校内支援体制の中で、「人不足」を補うための苦肉の策として、個人的なつてを頼りに学生のスタッフをお願いしてきましたが、それには自ずと限界があり、2名のスタッフを探し出すのがやっとでした。

●学生スタッフの募集を組織的に

そこで、既存の「放課後学習チューター*」の制度を活用して、学生スタッフを組織的に募集することになりました。年度当初に市教育委員会と大学が協議の上、日時と会場を設定し、大学構内で学生に対する説明会が開かれました。そこでは、約200名の学生を前に、学校でS R E Cを務める職員が説明に立ち、次のような2コースに分けて、スタッフとして参加する学生を募りました。

Aコース（学力向上支援）

- <こんな子に> LD等、国語、算数などの学習に困難がある児童（未診断の児童を含む）
- <とき・ところ>水曜日、午後3:00～4:00、コンピューター室など
- <やること> パソコンによるe-learning、プリント学習など、その子に合う方法で、「分かる」喜びが味わえるように、国語または算数の補充的な学習をする。
- <こんな方に> パソコンの操作や学習ソフトに詳しい、国語、算数などの教科の指導がしてみたい、LD等の子どもの学力向上支援について実践的に勉強してみたい方など

Bコース（学校生活支援）

- <こんな子に> ADHD、高機能自閉症等、行動や学校生活全般に困難がある児童（未診断の児童を含む）
- <とき・ところ> (月)～(金)の都合のつく時間、校庭・体育館・教室など
- <やること> 通常の学級に参加しない個別学習の時間に、子どもとマンツーマンで、キャッチボールなど運動的活動や、ちらし・ポスター作りなど製作的活動に共に取り組む。
- <こんな方に> 子どもと体を動かして遊ぶことが好き、デザイン、印刷、ペーパークラフト、粘土など、ものづくりの活動が得意、ADHD、高機能自閉症等の子どもの学校生活支援について実践的に勉強してみたい方など

※以上、「放課後学習チューター募集要項」より抜粋。

*文部科学省、県教育委員会、市教育委員会が、平成15・16年度に、調査研究事業として行ってきたもので、2年間で終了となる予定だったが、当面平成17年度は事業が継続されることになりました。次年度以後の継続は未定です。なお、英語の“tutor”は「家庭教師」という意味だが、訳語のチューターは「個人指導の教師」というような意味で用いられています。

●応募した学生スタッフと連絡・協議・チーム編成

最終的に、19名の学生の応募があったので、Eメールで連絡を取り、学生スタッフ説明会を開きました。その冒頭で、Aコース、Bコースそれぞれの支援の内容について説明するとともに、学生の希望を尊重しながらチーム分けを行いました。その結果、次のように、Aコース1、Bコース2の、計3チームが編成されました。そして、チームごとに、学生スタッフと職員（該当児童の学級担任）との打ち合わせが行われました。

☆放課後学習室（10名）＜Aコース＞

毎週水曜日の3:00～4:00（後半は職員会議の裏）、マンツーマンで教科の学習を行う。

☆チームT（6名）＜Bコース＞

学校教職員とともに、自閉症スペクトラムのタロウさんに対する、個別的な直接支援に当たる。

☆自律学級サポート（3名）＜Bコース＞

自律学級の活動に参加し、必要に応じて児童の活動を個別的にサポートする。

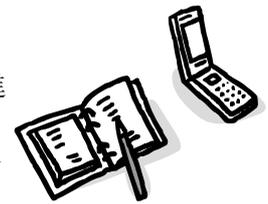
●学生スタッフを受け入れてのチーム支援の運営

学生スタッフに対しては、後掲の資料1「学生スタッフ留意事項」を配布し、勤務上の留意事項の徹底を図りました。そこには、各チームの拠点（受け付け場所）と担当職員を明示しました。更に、放課後学習室については、資料2「放課後学習室の運営」を配布し、各回の流れ、連絡・文書処理、当番職員などについて明示しました。こうして、学生スタッフの勤務が円滑に行われるよう配慮しました。

その後、支援の内容について、まとまった打ち合わせの時間は取れませんでした。教室での立ち話程度のごく短時間の打ち合わせや、毎回やり取りする「記録・連絡簿」（次頁図参照）などによって、学生スタッフと職員間の連絡を取り合いました。更に、チームTについては、学生が自主的に大学でケース会議を開きました。また、学校及び学生側の予定については、SRECが窓口となって、Eメールで連絡を取り合い随時調整しました。

●学生スタッフによる支援の成果

学生スタッフ導入による成果の一つは、子どもの自己肯定感や学習意欲の増進など、「学ぼうとする力」の向上であったように思われます。放課後学習室は、学級担任の側で用意したドリルや宿題などで進められましたが、学生スタッフとともに学習した子どもの日記には、次のように記されていました。



6月29日（水）

（4年・男子）

今日、学習チューターの先生とおべんきょうをしました。さいしょに算数の計算ドリルと日記のしゅくだいをやりました。計算ドリルは、チューターの先生にみなおしをしてもらって、3こぐらいまちがいがありました。日記もじょうずにかけました。また、チューターの先生とたのしくべんきょうしたいです。

また、ある子どもは、放課後学習室のある日に、「チューターの先生、まだ来ないかなあ」と言って、廊下に出てそわそわしていました。更に、別の子どもは、ふだんは宿題をやっているが、放課後学習室の次の日は必ず宿題をやってきて、それがその後も数日続くとのことでした。このように、首を長くして学生スタッフを待ったり、学生スタッフが来ない日にも何らかの波及効果が認められたりと、たとえ1週間に1回であっても、学生スタッフとの出会いが、子どもの学校生活に張り合いをもたらしているように思われます。

事例から学ぶ

学生スタッフによる支援は、日常的・継続的に多くの時間を当てるのが難しい反面、学生の希望や都合に配慮しながら十分な人員を配置することで、定期的に様々な支援が可能となります。その上で、職員と連絡を取り合い、子どもと近い立場で丁寧に対応することを通して、子どもの学習及び学校生活に対する意欲の向上などの成果が期待できます。地域資源の発掘を行ってみましょう。



学生スタッフ留意事項

〇〇〇立〇〇小学校

1 基本的留意事項

- (1) 学生スタッフの任務に当たるとき、その業務に関しては、学校の職員に準ずる。
 - ① 学校長の指導の下、教育活動に従事する。
 - ② 常時勤務ではなく、限られた時間の中で子どもと接する立場だが、一人一人の子どもの育ちに関与する立場であることに変わりはない。
- (2) 子どもと向き合い、誠意をもって、かつ柔軟に対応する。
 - ① 子どものしていること、しようとしていることに目を向け、子どものことばに耳を傾けて、その子の思いに寄り添うよう努める。
 - ② 自分の持ち味を生かしながら、自然で無理のないやり方で、明るく楽しい雰囲気づくり、関係づくりに心がける。
 - ③ 学習や行動などの上で、予想外のことや理解に苦しむことがあっても、自分の価値観で一方的に決めつけたりせず、「この子はどうしてそうするのだろうか」と考える視点をもつ。
- (3) 個人情報の保護については、特に細心の注意を払う。(守秘義務)
 - ① 記録などの文書はもとより、メモの類まで、個人情報の保護に留意する。記録やメモに、実名は残さない。他の子どもと区別する必要がある場合に限り、略称(イニシャル)などを用いる。
 - ② 文書はきちんと保管し、必要なくなった文書は、職員室のシュレッダーに掛けて安全に処理する。
 - ③ 必要に応じて、担当職員と文書や口頭で連絡を取れるようにし、特に難しいケースについては、ケース検討の機会を設けるが、そこで扱われた内容については、スタッフ以外に一切口外しない。

2 勤務に関すること

(1) 出勤・退勤

- ① 出勤時は、玄関から入り、事務室に立ち寄って、「勤務整理簿」に記入・押印し、吊り下げ名札を着用する。
- ② チームの受付・拠点はおのとおりのとおり。

- * 放課後学習室 コンピューター室 (SREC・担任)
- * チームT 保健室 (養護教諭)
- * 自律学級サポート 自律学級 (自律学級担任)

※ 担当職員に声を掛け、記録・連絡簿を受け取る。

- ③ 退勤時は、記録・連絡簿を所定の場所に収納し、名札を返して帰る。

(2) 記録・連絡

- ① 放課後学習室は子ども一人に1冊ずつ、チームTと自律学級サポートはチームで1冊、「記録・連絡簿」を用意し、所定の場所に収納して管理する。
- ② 記録・連絡簿の1ページ(記録・連絡票)が、学生スタッフ1名の1回分で、活動内容、子どもの様子などの記録、質問・申し送りなどの連絡を記入する。

(3) 持ち物・服装

- ① 上履き、印鑑、筆記用具、その他必要に応じて。
- ② 服装は自由だが、着替えの場所がないので、すぐ活動できるような軽装が便利。

事例 3

子どもにとって身近な教職員で小委員会を組織(小学校)

～「個別の指導計画(短期)」を活用した支援～

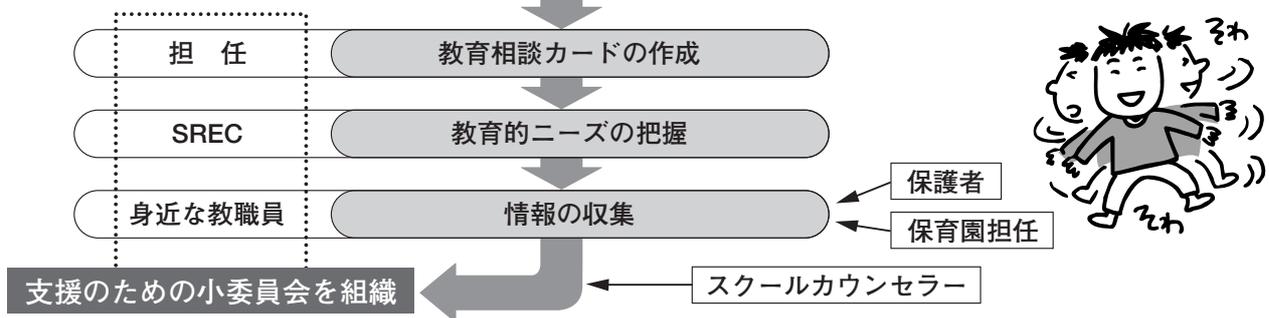
アヤコさんは通常の学級に在籍していますが、特別な教育的支援が必要な子どもです。担任一人では対応がむずかしく、他の子どもの学習指導との狭間で、担任はどう対応したらいいか悩んでいました。そのうちに、アヤコさんに学級不適應の様子が見られるようになってきました。悩みながらもアヤコさんを気にかけていた担任はそのことにいち早く気づき、教育カードを作成してSRECに相談しました。

これは、アヤコさんにとって身近な教職員で校内委員会小委員会を組織して支援を行った事例です。

●アヤコさんへの支援の流れ

【アヤコさんの気持ちや様子】

- ・教室にいても落ち着かない。
- ・他の教室に行きたくなっちゃう。
- ・授業がおもしろくない。
- ・ぼんやりしたり無気力になったりしてしまうことがある。



1週間単位で「個別の指導計画」を作成し、小委員会で継続的・発展的に支援

○年○組 アヤコさんの支援

1. 今週の重点 (○月○日～○月○日)

- ・前週、休み時間に、自分から友だちに話しかけている姿が見られました。周りの子どものやっていることや活動への関心が高まってきているようです。いろんな場面で、周りの子どもや活動に関心を向けられるように支援をしてみましょう。

2. 今週の予定

	○日(月)	○日(火)	○日(水)	○日(木)
朝の活動				
登校				
1				
2				
休み時間				

3. 留意事項

- 先週、いつもは活発なアヤコさんがぼんやりしている姿が見られました。その前後の様子を丁寧に検討し、何がそういう姿につながっているかを明らかにしたいですね。

○前週に行った支援の様子や情報を小委員会で出し合い、伸びてきている事柄を、今週の支援の重点にしました。

○アヤコさんへの願いの他に支援する際に気をつけたいことなどを、重点として記入することもありました。

○支援者の空き時間を確認し、対応できる時間や場所を調整しながら記入するようにしました。

○前週の様子によっては、活動場所や支援者を絞ることもありました。

○自分の学級で楽しくできた活動は、大切に位置づけるようにしました。

○支援の重点以外のことで、共通理解しておかなければならない配慮点について記入しました。

●子どもの教育的ニーズの把握は教育相談カードから

年度の初め、各教室で特別な教育的ニーズのある児童がいることに気付いた時は、担任が「教育相談カード」を作成してSRECに連絡することを、全校の教職員で確認し合いました。

教育相談カードを作成することには、次のようなメリットがありました。

- ・カードが子どもを共通理解する際の資料となり、担任とSRECがこれからの対応についてじっくりと話し合うことができました。
- ・必要に応じて、カードを使いながら複数の教職員と情報交換することができました。
- ・スクールカウンセラーからアドバイスを受ける場合の資料として使えました。
- ・「個別の指導計画（短期）」を作成する際の資料となりました。
- ・当初の教育的ニーズの記録として残しておけます。その後の支援の参考になります。

●アヤコさんの身近な教職員によって小委員会を組織し、毎週支援会議を開催

身近な教職員による小委員会は次のように組織し、運営上の配慮をしました。

- ・アヤコさんに対しては、担任だけでなく、学習習慣形成支援、学年主任、養護教諭、自律学級担任などアヤコさんの身近にいる教職員が、それぞれの立場で支援をしてきていました。それぞれが、アヤコさんの理解、支援の手だてにつながる情報を多くもっており、それらの情報を集め整理することによって、支援の方向が具体的に見えてくるのではないかと考え、身近な教職員で小委員会を組織しました。
- ・第1回の小委員会では、保護者や保育園の担任から聞いた情報や小委員会メンバーのもっている情報を基に、教育的ニーズの背景について再考察しました。そのことにより、支援の必要性などの共通理解が深まり、スムーズに支援をスタートさせることができました。
- ・小さな変化に対応するため、毎週支援会議を開催しました。話し合った内容は、SRECが「個別の指導計画（短期）」としてまとめ、翌週の初めにメンバーに配布しました。
- ・支援会議は、学習習慣形成支援の勤務時間に配慮し、毎週末、給食後30分行いました。

●「個別の指導計画（短期）」

「個別の指導計画（短期）」を作成することにより、次のようなメリットがありました。

- ・支援の経過を見返し、次の見通しを全員で共通理解して、それぞれの役割を果たしながら、連携して支援することができました。
- ・支援してほしい教職員や時には教職員全員に配布して、協力を仰ぐこともできました。
- ・保護者に経過を伝えたり、家庭でもできる支援の内容を伝えたりするための資料として使うことができました。
- ・アヤコさんの様子に変化が見られた時には、対応する先生にそのことを情報として伝えるための資料として使うことができました。そのことによって、必要な情報を確実に伝え、適時適切な支援につなげていくことができました。

事例から学ぶ

教室で困っている子どもがいる場合、対応を先延ばしにすることはできません。まずできることは、その子どもにとって身近な教職員で支援チームを組織することです。身近な教職員は何らかの形で支援を行ってきており、それらの情報を収集・整理することによって、有効な支援方法が見えてきます。本事例のように、毎週支援会議を開催して「個別の指導計画（短期）」を作成することは容易なことではありません。しかし、こうした努力が笑顔につながります。

事例 4

授業公開を通じた他機関との連携(小学校)

～校内支援体制の工夫と他機関との共同評価～

友人関係のつまずきから5年生後半不安定になり原学級に入れなくなったナツコさん。校内ではナツコさんの支援チームを作り支援を行いました。また、担任は授業を専門機関や教育機関に見てもらい、アドバイスをもらって授業改善に努めた結果、ナツコさんは6年生の後半から教室で過ごせるようになりました。

●学級担任でもあるSRECが中心となって、ナツコさんの校内支援体制をつくる



SREC

- 1 ナツコさんの心の状態の理解を大切に実態を把握して、「個別の指導計画」を立てましょう。
- 2 支援チームが主体となってナツコさんを支援（直接的支援）し、校内支援委員会・職員会は支援チームを支援（間接的支援）しましょう。
- 3 校外の専門機関や教育機関と積極的につながり、授業を公開してアドバイスをもらいましょう。

●1年間にわたる支援の実際

1学期の支援



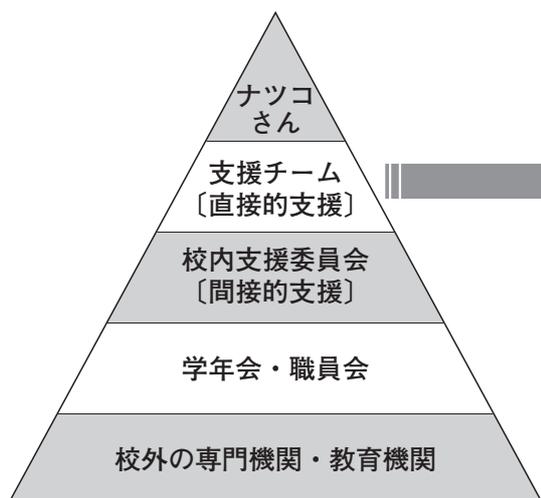
ナツコさん

- ・私だけの先生でいてほしい。
- ・原学級では緊張してしまう。

校内委員会でナツコさんのケース会議を繰り返して行いました。校内委員会では「個別の指導計画」を作成しましたが、それによって支援についての共通理解が図られ、徐々に支援のピラミッド（校内支援体制）ができあがりました。支援チームのメンバーとその役割を明確にし、支援に当たりました。

A市巡回相談員からは、「活動のエネルギーが低いので、エネルギーをためていけるようにすることが大切」との助言があり支援の際に配慮しました。

校内における支援のピラミッド



ナツコさんへの支援

支援の内容	支援の場	支援する人
個別の教科学習	職員室	自律学級担任
牧場体験学習	職員室	SREC
調理活動	家庭科室	家庭科担当
実験理科	理科室	理科専科
バドミントン	体育館	学習支援担当
書道	家庭科室	養護教諭
箱庭活動	通級指導教室	通級指導教室担当

2 学期の支援

徐々に学校の流れに沿って行動できるようになったナツコさん。運動会をきっかけに体育や給食を原学級で過ごせるようになりました。また、学級の友だちと手紙の交換を始めることもできるようになりました。

ナツコさんは、自律学級で始めた「牧場体験学習」に参加していましたが、校内で授業公開することになりました。授業こそがナツコさんにとって支援の大切な場だと考えたSRECは、これを機会に校内ばかりでなく他機関の専門家にも参観してもらい、共同評価を行うことにしました。

単元名 「牧場学習のことをわくわく新聞に書いて校内の友だち、先生に伝えよう」

(学習活動) 新聞の内容として、読んでもらう人に分かるように牧場のことを文章や絵にかく。

授業研究会では、次のような意見が出されました。

まだ自分のことで精一杯な段階。得意なこと熱中できることがもてるようにすることが大切です。

授業において役割がはっきりしてくるといいですね。主体的に取り組める活動を仕組んでみてはどうでしょうか？

素直に甘えられないところがあるんです。居場所がやはり必要ですね。

この授業の姿を原学級へつなげられるといいですね。

ナツコさんだって学びたがっているはず。授業の中でナツコさんが認められる場を作ることが大切なのでは？

(参加者)

自律教育担当教育支援主事
療育コーディネーター 学校長
教頭 学級担任 自律学級担任
通級指導教室担当 自律学校教育相談



共同評価を行ってみたいのSRECの感想

「初めての試みでしたが、さまざまな視点からアドバイスしてもらい、とても参考になりました。ナツコさんの心の状態をより深く見つめる機会ともなりました。また、私たち自身がこれまでの実践に対して励まされたような気持ちになりました」

3 学期の支援

原学級で行われる学習活動への配慮の仕方、個別学習の組み方、ナツコさんが自分の気持ちを見つめられる時間の確保など、支援の工夫を行いました。臨床心理士によるセラピーも始まりました。

4月からも友だちと
すごしたいなあ。
(心のつぶやきノートから)



事例から学ぶ

本事例においても、「個別の指導計画」にそって支援チームを組織するなど、まず、校内における支援体制をしっかりと構築しています。その上で、校外の専門機関や教育機関が授業参観やその共同評価に参加することが有効な支援となります。「授業の在り方」を共に考えている取り組みが、大変参考になります。教師自身が支援の現状を確認し、励まされるとともに、子どもへの支援をよりいっそう充実させてくれます。

事例 5

個別支援のための人員・時間確保の工夫(中学校)

～週持ち時間数と時間割に注目！～

「特別な教育的支援が必要な生徒はいるが、個別支援に対応できる人員や時間を確保できない」という悩みを抱える中学校は多いようです。本事例では、週持ち時間数の基準の設定や時間割の組み方に注目し、人員・時間確保を工夫した中学校の実践を紹介します。この工夫により、学習支援係会を時間割に位置づけて支援の方向を決めたり、必要に応じてTT（チーム・ティーチング）に入ったりするなどの支援が可能となりました。

●「生徒指導係」「教育相談係」「学習支援係」が連携し、校内支援体制の基礎をつくる

Y中学校では、年度末に新年度の校内組織を立案する際、SRECからの提案で、従来の「教育相談係」「生活指導係」に加えて「学習支援係」を新設し、3つの係が連携するための「生活安定委員会」を組織しました。委員会から、支援に当たる人員や時間の確保についての提案がなされました。

なぜ係が連携するのか

学校生活で困っているMさんがいます。

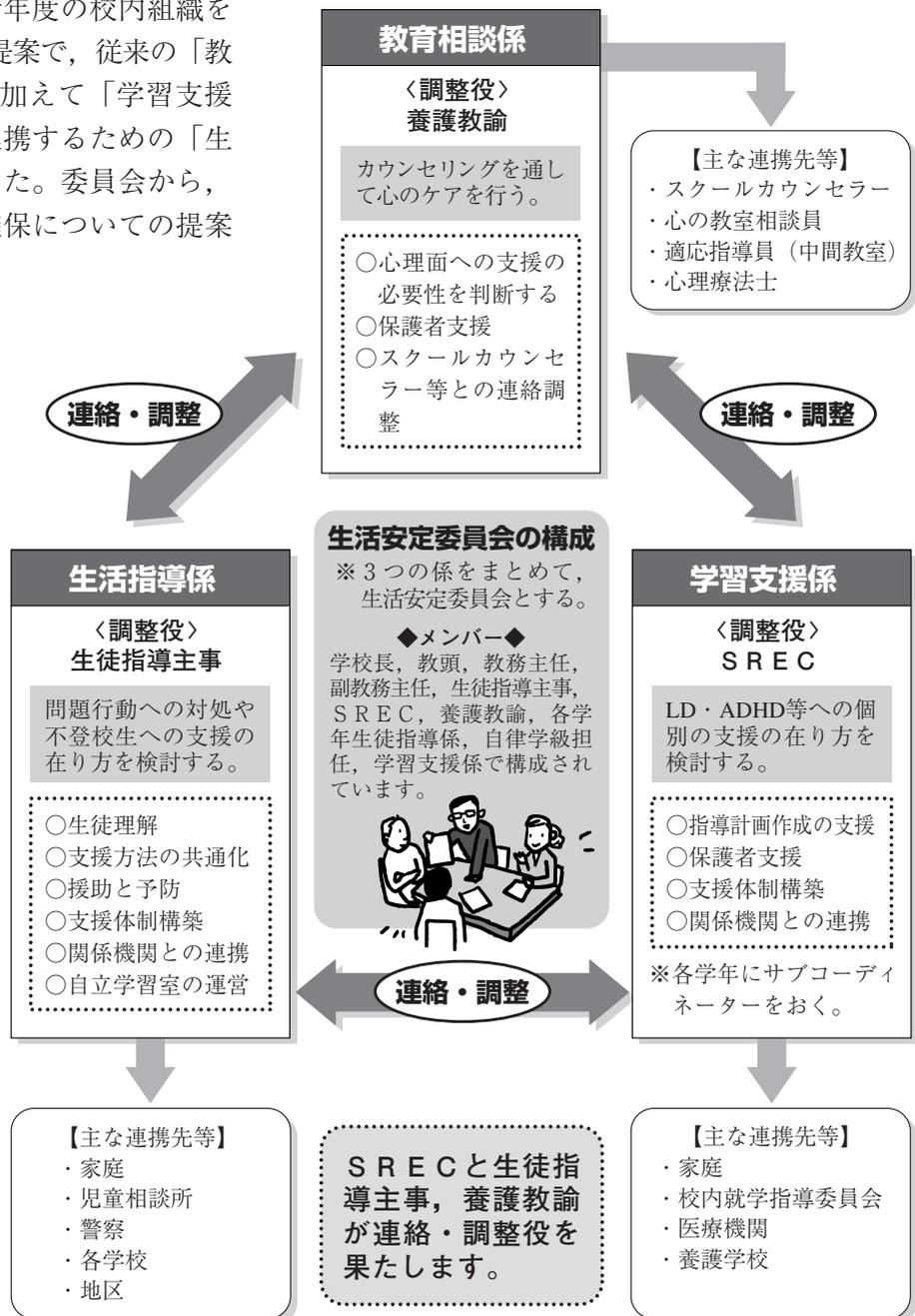
まず、行動の様子について、生徒指導係会で検討しました。その中で、つまずきの原因が、家庭環境と学習不振にあるととらえ、各係が次のような支援を行うよう考えました。

◆生徒指導係は、Mさんの生活全般と保護者への支援。

◆教育相談係はカウンセリング的な対応を通して心のケア。

◆学習支援係は、学習の状況の把握とサポート体制の検討と支援。

3つの係が連携して多面的に支援を行うことで、より有効な支援になると考えました。



Y中学校の生活安定委員会の組織図

●学習支援を行う人員を確保するために、担当時数の算出方法を工夫する

教諭	①週教科担当時数 (自律学級担当時数も含む)	②その他の時数 (道徳・学級活動等)	③学習支援に関する 週時数	④週担当総時数
A教諭	22.1	3.0		25.1
B教諭	22.0	3.9		25.9
C教諭	20.7	2.9		23.6
D教諭	19.4	4.4		23.8
E教諭	18.1	4.4	1.0	23.5
F教諭	18.7	2.9	3.0	24.6
G教諭	14.0	3.4	6.0	23.4
H教諭	19.0	2.9	2.0	23.9

TTや指導計画立案などの学習支援を行う人員を確保するために、1人あたりの週担当総時数の基準(表④)を23～26時間と決め、自律学級支援も含んだ週教科担当時数(表①)と、その他の時数(表②)を合計して総時数との差を出しました。教科によって週指導時数が異なるため、時数に余裕ができる先生が生まれます。その先生を、学習支援のメンバー(表③)に位置づけました。

●学習支援係が活動する時間を、時間割に位置づける

係会を時間割に位置づける

学習支援係会を金曜日の5時間目に位置づけました。原則的には不登校生支援係と隔週で開きますが、状況によっては、毎週開くこともできます。

係会では、対象生徒の学習上のつまづきを分析し、支援方法の大筋を決め出し、学級担任や教科担任、学年会に提案する役割を果たします。

空き時間を時間割に位置づける

係会のメンバーが空いている時間を週時間割に位置づけました。その時間は担任や教科担任の要請に応じて支援に行けるようにし、併せて不登校生などの家庭訪問にも対応できるようにしました。たとえばG教諭は、5時間(係会の1時間分を除いた時数)個別支援が可能になるわけです。

この方法は、学校規模や学校の状況によっても異なります。しかし、何よりも素晴らしいのは、「週持ち時間を多くしても、生徒のために学習支援ができる体制を作りたい!」という思いを全教職員が確認し、一致して取り組んでいることです。今困っている生徒に今支援することを第一に考え、人員が足りないからと諦めることなく、学校独自の努力で人員を確保し学習支援を行っています。

事例から学ぶ

支援体制を学校独自の工夫でどこまで作ることができるか。教職員がその支援体制の必要性和意義を共通理解できるかがキーポイントです。SRECを中心に、学校長、教頭、教務主任、自律学級担任等が連携し、支援体制づくりの推進力になることで実現が可能となります。

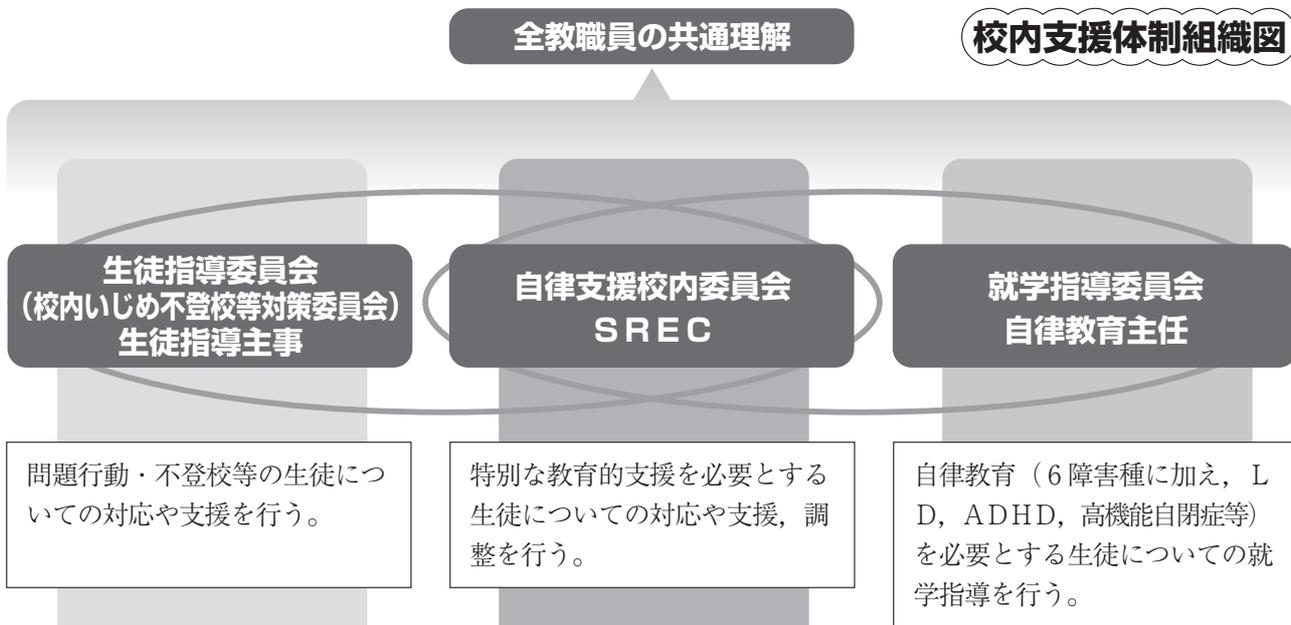


生徒・保護者に寄り添った支援チームづくり(中学校)

～各委員会を連携させるためにSRECがかかわって～

自律教育支援の対象範囲がほぼ全児童・生徒ということから、「SREC一人では対応が難しい」という声が聞かれます。本事例では、中学校において、生徒指導委員会、校内就学指導委員会等、現行の組織の在り方を大事にしながら新設の自律支援校内委員会・SRECの位置づけや役割などをはっきりさせていくようにしました。これによって教職員の連携が取れ、特別な教育的支援を必要とする生徒への対応や働きかけがスムーズになりました。

●各委員会が連携して取り組み、生徒・保護者のニーズに合った支援チームをつくる



問題行動・不登校等の中でも、障害に起因する場合や通常の教室で支援を行うなど、特別な教育的支援を必要とする場合は、自律支援校内委員会・SRECが担当しその支援、調整に当たる。

●支援チーム(各委員会)・SRECが生徒・保護者に寄り添いながら支援の調整を行う

<p>●ヨシエさんの支援チーム</p> <p>生徒指導主事 (SREC)</p> <p>生徒指導委員会・校内いじめ不登校等対策委員会</p> <p>支援チーム</p> <p>○生徒指導主事・学級担任・養護教諭・スクールカウンセラー・図書館司書・長期入院児童生徒訪問支援員 6名</p>	<p>●マモルさんの支援チーム</p> <p>SREC</p> <p>自律支援校内委員会・就学指導委員会・生徒指導委員会</p> <p>支援チーム</p> <p>○知的障害自律学級(以下知障学級)担任・原学級担任・養護教諭 3名</p>	<p>●サトミさんの支援チーム</p> <p>SREC</p> <p>就学指導委員会・自律支援校内委員会</p> <p>支援チーム</p> <p>○SREC・知的障害自律学級(以下知障学級)担任・情緒障害自律学級(以下情障学級)担任・原学級担任 4名</p>
---	---	--

- 「小学6年で、週2～3回夕方保健室登校」との情報より、ヨシエさん（現在中1）には小学6年時から生徒指導主事が中心となって、小中連絡会や個別相談（保護者）等を担当している。

〈支援の実際〉

生徒指導主事

- ・小学校の時は健康面から院内学級に入級して生活を送っていたことを聞き、不登校生としてとらえていた部分を修正。養護教諭・スクールカウンセラーにも対応してもらえるよう連絡・調整をして本人、保護者のケアに当たる。
- ・小学校、院内学級、医療機関等との連携を図る。

S R E C

- ・入学後は、つながりの深い生徒指導主事がそのまま担当し、本人及び保護者のニーズを正確に把握して進めていけるよう連携体制をつくった。

学級担任

- ・安全面から廊下を走ることやふざけることを控えるなど、全校生徒向けの共通資料を作成し、全教職員共通理解のもとで全校指導に当たれるようにする。
- ・保護者付き添いができるように配慮をする。

〈現在の様子〉

4月初めは保護者が付き添って、安心して学校生活を送った。体育の授業の裏では、図書館で読書をするなど、居場所の拡大で生活空間が広がり気分転換にもつながった。全校で生徒理解を深めたことで、周りの生徒の意識が高まった。現在は、自宅療養をしているため、週1～2回訪問支援員が通い学習等を行っている。

- 中学1年途中から知障学級に入級している2年生のマモルさん。原学級に戻って生活したいという希望があることから知障学級担任と原学級担任が連携して支援体制をつくる。

〈支援の実際〉

S R E C

- ・原学級での授業に出られない場合は保健室や自律学級で過ごせるように連絡・調整する。その時には相談にのり気持ちの安定を図るようにする。

知障学級担任

- ・説明が速いと理解することが難しく、ゆっくり説明すると理解しやすいことから、できる範囲で個別指導を確保してもらえるように教科担任に伝える。

原学級担任

- ・苦手なことは避け、動かない、隠れる等の行動をとることから、担任が間に入り友だちとの信頼関係づくりに努める。
- ・「今マモルさんは、こんなふうに思っているのではないかな」など、マモルさんが言葉で表現できない部分を担任が補うようにする。

〈現在の様子〉

居場所の確保から安心して原学級で生活しているが、苦手なことを避け、保健室・自律学級で過ごす時もある。そういった時でも、マモルさんなりの理由があることを認め、原学級の友だちが理解していくことが必要。

また、こういう状況下で、マモルさんのセルフエスティーム（自尊感情）を高めていく具体的な手だてを見いだしていくことが支援チームの課題となっている。

- 中学1年で不登校。知障学級生徒の励ましを受けて登校できるようになり、居場所を知障学級に求めたサトミさん。2年時に就学指導委員会の判断を受け情障学級へ入級。しかし、知障学級の生活・環境で安定することから情障学級担任と知障学級担任が連携して支援体制をつくる。

〈支援の実際〉

S R E C

- ・本人・保護者のニーズから、居場所（生活・環境）を広げる。
- ・知障学級、情障学級、原学級の時間割から受けることができる授業を選び、自分の時間割を作れるようにする。状況に応じて変更していく。

〈現在の様子〉

生活・環境を整えることで本人のやる気、自信につながっている。しかし、教科担任を選び好みしたり、苦手な教科を避けたりすることが起きてきた。プレッシャーやストレスを感じない範囲で時間割を考えながら、将来や進路のことなど徐々に深めていき、自己実現に向けて取り組むことができるようにしたい。

事例から学ぶ

S R E Cがかかわりながら各委員会で支援体制を検討し、生徒・保護者に寄り添える支援チームをつくること、そして支援の役割を明確にし具体的に取り組むこと、これらが、生徒・保護者にとっても学校に対する安心感につながります。